

2019年4月25日発行

地域と協同の 176号 研究センターNEWS

【巻頭言】

地域と協同の研究センターに込めた素朴な思い、これからへの期待 設立25周年にあたって

田邊準也

「生協運動とは何か」を考えるのが生協運動

いまのコープあいちの前身、めいきん生協（名古屋勤労市民生協）創立期の理事長だった吉岡紹直さんはかつて、「生協運動とは何か」と問われ、「それを考えるのが生協運動だ」と答えました。少し、はぐらかされた感じのする言葉でしたが、まさに「生協運動の真髄」を突いていると多くの人から受け止められました。

生協運動の創立期にあっては、知ること、考えること、相談することはごく自然の姿ただただでなく、自立（ひとり立ち）を促す意味合いからも素朴に納得されたのだと思います。私にとって、この言葉は生協運動に関わる中で、また、地域と協同の研究センターにあって常に活動のよりどころでした。

共に知る、考える

生協運動の創立期、関わった殆どの人が生協運動に関する詳しいことは何も知りませんでした。よく消費者は安全・安心な商品が欲しくて生協運動に参加したと言われますが、実際にはそういう商品がないから生協運動を創立しようとしたのです。だから誰も何も知らなくて当然でした。現実には物価高と商品被害があり、地域の消費者はどうすればよいか知る努力から始めるしかありませんでした。隣近所で話し合い、知る努力、探す努力が始まり素朴な共同購入が始まりました。そこには常に「考える努力」がありました。消費者を大学生協が支援した、大学生協には既に知識があったと思われがちですが、その職員も殆ど何も知りませんでした。共に知る、考えるしかありませんでした。ただし、教える人がいなかったわけではありません。例えば、たまたま名古屋大学の有志研究者の皆さんが食品研究会を開いていることを知り、そこに参加して食品添加物のこと、農薬のことを知りました。そこから、無添加食品探し、づくり、無農薬野菜探しが始まりました。洗濯洗剤については三重大大学の研究室で学びました。更に、本当に良い商品（伝統商品、農産物等）については、メーカー、生産者がいました（そこでは消費者が生産者、メーカーにとっての教師役でもありました）。【2頁につづく】

CONTENTS		地域と協同の研究センター4月の活動
1	【巻頭言】地域と協同の研究センターに込めた素朴な思い、これからへの期待 設立25周年にあたって 田邊準也	1日(月)市民の講座運営委員会, 3日(水)常任理事会①
3	4.6.「人口減少社会と協同組合」第2回公開セミナー報告① 向井 忍	6日(土)「人口減少社会と協同組合」第2回公開セミナー 9日(火)NEWS編集委員会, 研究フォーラム地域福祉を支える市民協同
6	「市民が協働を学ぶ講座」概要報告—最終報告— 熊崎辰広	10日(水)研究フォーラム環境世話人会 11日(木)名古屋市立大学寄付講義① 12日(金)尾張地域懇談会世話人会
7	第13回三河地域懇談会 豊橋生協会館へ寄らまいかん 開催 事務局	15日(月)愛知の協同組合間協同相談会 16日(火)くらしを語り合う会
8	情報クラブ	18日(木)名古屋市立大学寄付講義② 20日(土)第5回理事会
10	第19回通常総会・総会記念シンポジウム開催のご案内	22日(月)アジアの平和、食と文化フェア拡大実行委員会
12	企画案内・寄贈・書評依頼の書籍のご紹介	25日(木)名古屋市立大学寄付講義③ 26日(金)第77回生協の(未来の)あり方研究会 30日(火)岐阜地域懇談会

【1頁より】

他方で、組合員、職員は、生協運動の仕組み、組合員参加の仕方、職員の働き方について、互いに模索しただけではなく、多くを先人（生協）から学びました。お互いを知る、学ぶ、考える過程が持つ大切さは、そこからつながり、きずなが生まれることです。CO・OP商品、産消提携商品などはその確かな成果でした。「生協運動とは何か、それを考えることが生協運動である」という言葉は「地域と協同」というテーマにも当てはまりました。

地域、「協同」、とは何か

生協運動にあつて、暮らしと協同は同時に地域と「協同」でもありました。

生協運動の創立期、地域での問題が絶えませんでした。小売商の皆さん、例えばまだ統制経済の名残のある中、米屋さん、酒屋さんからの反発は厳しいものがありました。スーパーマーケットが拡大する流通情勢の中、生協生活文化会館（名古屋市千種区）の建設にあたつても激しい抵抗がありました。そんな中、生協運動はどうあればよいか、生協運動と小売商の関係はどうあるべきか、学者、研究者の皆さんの協力を受けながら真剣な相談をしました。

また、めいきん生協の設立と同年、障害者の自立を目指す共同作業所作りが始まり、「ゆたか福祉会」が設立されました。しかし、お互い、地域の新しい運動としてどう進め発展させればよいのか切実な課題でした。地域には、労働組合や文化団体など願いを同じくする沢山の組織がありました。こうした皆さんと共に、それぞれの組織を発展させつつ、お互いに協力してより良い地域づくりができないか、学者、研究者の皆さんの協力を得て、「まちづくり協同シンポジウム」を試みました。そしてこのシンポジウムが契機となり研究センター活動は始まりました。

素人、専門家、みんな、

ところで研究センターとは何かを、「考えることが生協運動である」という言葉に照らして考えると「それを考える」ことになります。その際、誰がどう考えるかが大切です。私は素朴に「みんなで考える」と考えてきました。その一つが会員みんなによる研究です。会員を大きく分けると実践者と学者研究者になります。実践者自身、研究者自身、と同時に両者の協力です。その際、実践者の研究とはどう

いうことか、どう進めればよいか問題です。

今日、暮らしの変化、それを支える社会の変化は急速です。その背景にはあらゆる分野での専門化、その高度化があります。他方で、あらゆる人が素人になっています。情報は溢れていますが多くの人が情報に飢えています。その典型が消費者です。結果、消費者は、時代の流れに取り残されたかのような不安、孤立感、場合によっては自信喪失に陥っています。少なくとも私の場合。

消費者は知ることを切実に求めています。ひいては考えること、参加することです。

消費者は「素人」です。然し、カッコつきの素人です。暮らしは総合的です。誰もがどこかに関与しています。その意味で、「消費者」はどこかの部分では「専門家」です。専門家でより高度なレベル、特殊分野に精通した人が、「専門家、学者」です。研究センターでいう「みんな」はこのような人々と私は考えてきました。

かつて、生協運動の始まりの頃、消費者組合員は班という場でお互いに情報を交換し相互に了解し合うことで真実を確かめようとしてきました。みんな知らないことを弱さとせず、知る意欲でお互いに励まし合ってきました。そこには何らかの意味での専門家がいました。お互いを知る中で、自信を取り戻し、実践を励ましていました。

同時に、そこには常に「専門家、学者研究者」の存在がありました。

みんなで作るみんなの研究センターへ

こういう経験をもとに私は、研究センターでは「みんなで考える、みんなの研究センター」を目標にしたい、と考えてきました。なかなか難しいと思いますが、その方向で進んでいると喜んでいますが、でも、まだまだこれからです。

そのためには、研究センターをみんなの身近なものにしなければなりません。地域懇談会などへの参加を一層広げる必要があります。

更に、実践者の組織、典型は生協運動ですが、その場での学習活動の一層の推進、情報の集約と普及など、これまでの努力を引き続き工夫する必要があります。そのためにも、研究センターについても、「研究センターとは何か、それを考えることである」との言葉を掲げるべきではないか、などと考えた次第です。

(たなべ じゅんや、研究センター理事・設立当初の役員)

【4.6.「人口減少社会と協同組合」第2回公開セミナー報告①】

「人口減少社会」の先進モデルがみえてきた —生協とコミュニティの結びつき—

向井 忍

(地域と協同の研究センター専務理事)

4月6日(土)、公開セミナー「人口減少社会をどう迎えるか～協同組合とコミュニティとの結びつきを力に～」を開催しました。公開セミナーを企画した背景とセミナーから見えてきたことを報告します。

背景～「2040年問題」をどう迎えるのか

今回の第二回セミナーでは、1970～80年代に農村からの人口移動で生まれた都市空間を基盤にして成長してきた地域生協は、大災害時においてもその情報と物流ネットワークは注目されていますが、今や農村地域や地方都市での存在感を高め、毎週確実に商品を届けるだけでなく、コミュニティごとに人をつなげる新しい役割を發揮している事例に光をあてました。その歩みは単純ではありません。1990年台後半から生協もJAも自治体も合併を進めてきましたが、今再び人口減少や「経営改善」などを背景にJAでも合併時以来の支所やAコープ・ガソリンスタンドの撤退がすすんでいます。生協も約10～20年前に合併して全県エリアとなり、宅配が中心となって班のつながりを生かす政策は少なくなり、共同購入を担当する職員も正規・パート・委託と多様になっています。こうした中で「少子化」「高齢化」が進み「買い物」できる店舗がなくなり、毎年人口が減少するコミュニティで、新たな変化がうまれている背景を探りました。

こうち生協の基調講演と、三重・愛知・岐阜の三つの実践報告

基調講演では、こうち生協の西岡理事長より、全県の人口が70万人の高知県で、共同購入では地元市町村の特産物を企画・全国の生協にも紹介し、店舗では地元の有力スーパーと惣菜の扱いや研修などを提携し、高知県や民生委員とともに全県的な見守りネットワークをつくっている事例が紹介されました。

第一の実践報告 (三重県)

コープみえの共同購入責任者と地域担当の職員から、北勢・中勢・南勢と広がる三重県での実践のなかでの気づきが率直に報告されました。地域の変化にもかかわらず「全県一律の進め方・他のモデルの機械的な導入をしていたのではないか」「宅配を拡大し、配達ポイントが増え、職員の滞在時間は短くなることの循環ではいけないという危機感はあるが、班人数が減ることやステーション(拠点受取り方式)をどうするのかについては政策がなかった」こと。事実をつかむために、共同購入事業が蓄積する事



実データを分析比較するとともに、理事も分担して現場を見つめたこと。「なかまづくりで毎日訪問している職員にインタビューをすると、地域には認知症、ゴミ屋敷の人もある。もっと地域と一緒に進めなければならない」こと。伊賀市摺見を担当する職員は、買い物困難な地域で車の運転が困難になった

70代夫婦を、担当する班の組合員と力をあわせて班にさそった事例が報告されました。伊賀市は2004年に6市町村が合併して誕生。摺見地区は2015年人口で48世帯162人。中心地域から近隣の店舗まで車で10数分の地域です。70歳代の夫婦の話聞いて「家族、食、困りごとに柔軟に答えられる関係があって初めて地域担当と言える。これを突き詰めることができるのは、生協の地域担当だけ」と語りました。

第二の実践報告（愛知県）

コープあいち・岡崎センターの副センター長と現在の地域担当、住民組織代表の三人で行われました。2006年に愛知県の岡崎市に編入された旧額田町の千万町町・木下（ぜまんじょちょう・きくだし）は、あわせて58世帯。市街地から約40分の中山間地域、新都市作出からも約40分です。ある日、コープあいち岡崎センターに千万町町に住む住民から買い物の相談の電話が入りました。「簡単なのは宅配を勧めること」ですが、あえてその方法はとらず、住民の方々とどうするかを考えようと思いました。ところが「なぜ生協が？なぜ生協と？」という



反発が聞こえてきました。職員は地域の住民が生協を理解できるよう、情報提供や商品紹介に徹しました。事態を動かしたのは、生協の理念や考えに共感された住民が各世帯にあてて書いた「手紙」でした。生協説明会には、驚くことに世帯の約半数が参加し55軒で23軒が加入しました。廃校になった千万町町小学校は今「千万町町楽校」となり、市の委託を受けて住民組織が管理しています。毎週の共同購入の受け取りだけでなく、さまざまイベントが行われ、コープあいち福祉基金も活用されています。その様子は冒頭にDVDで紹介されました。報告に立った住民代表（元教頭先生）は「なぜコープあいちか？それは、ふだんのくらしをしあわせに、コープあいちが地域の架け橋になるという理念に共感したから」「JAの支所も撤退しました。不便なところからきってしまうと未来はありません。“ふるさとにたのしく、くらすみんなが、しあわせに”がわたしたちのスローガン。」と語ります。地域担当は「山間部だけでなく、岡崎市内も中心部のあちこちに困りごとがある。市役所周辺・中心地も坂道で買い物困難。ここに生協の未来があります」と締めくくりました。

第三の実践報告

コープぎふ飛騨支所に在駐する職員と、たすけあいひだの組合員の協力で行われました。人口減少が続く岐阜県は2018年度に200万人を下回ります。旧宮川村・河合村は2004年に合併した飛騨市の中心部からさらに50分の山間地域です。事前取材で、地域振興事務所（旧役場）の隣で菓子屋を営む女性は「合併してから変わった。道路が通って若い人が富山や高山市に出る。介護が必要になると親を引き取る。雪で屋

買い物の場としてのサロン



サロン会場宮川地域振興事務所に並ぶ、JA販売車と生協配達車



サロン+生協共同購入班 サロン中こむ屋さんの販売 地域バスひだまる

根が折れる大きな空き家がたくさんある」と語っていました。宮川の域振興事務所とJR坂上駅の間にある唯一のJA店舗とガソリンスタンドが撤退することになり、コープぎふ飛騨支所に行政から買い物支援の相談がありました。しかし、配達だけでは困難な地域です。支所の職員と“おたがいさまひだ”のメンバーは共同購入とサロンを併設したプランをしました。すると地域包括支援センターが動き、行政と地元の住民による“み～んな、よらまいか”三回プログラムが提案されました。宮川町の75歳以上の住民は35人。生協だけでは賄えないので、JAの移動店舗、地域の店、大型雑貨、衣料、富山県のパン屋もサロンに集まります。三回のサロンのあと住民がコープぎふの組合員活動補助を活用して自立した母体をたちあげています。こうしたサロンは、河合地域や古川町など、飛騨市内に5～6カ所目が広がりつつあります。

「生協が」から「生協も」「生協と」へ

JA店舗が閉鎖したり、小学校が廃校になったり、高齢で車の運転が難しくなる地域において「買い物」とは、単に「商品を購入する方法」ではなく、人が集まり、おしゃべりし、こどもの声が聴こえ、昔からの友人と話せる機会です。これは金銭で賄えるサービスでは代替できません。会場で放映されたDVDで全万町小学校の元教頭先生は「なぜこのような素晴らしい小学校を廃校しなければならないのか」という悔しさを語っていました。「買い物」の不便さの解決は、そうした想いの住民が生協と一緒に地域のつながりを再生する関係です。各報告では共通してそのような関わり方を「生協が」でなく「生協も」「生協と」と表現されました。「買い物困難だから宅配を勧める」のではなく「住民とともに班/共同購入とサロンをつくる」ことを提案します。職員の仕事は「配達担当」でなく「地域担当」です。各報告を住民を主体に表現すると、住民の中に生協に加入している方がいます。住民組織や行政職員は地域の暮らしを心配して動き始めます。キーパーソンが登場し、制度やルールを柔軟に活用します。地域包括支援センターは“サロンの立ち上げ”として支援し、地域振興事務所（元役場）や防災や住民の交流拠点（元小学校）が活かされます。買物をとおして、人のつながりを維持し、人があつまる場をつくるために、生協の仕組みが活用されます。生協の事業や剰余金は、家計（買い物）や活動（サロン）、仕事（商品のお届け）、助成（拠点の整備）などの形で地域に還元されます。

「生活協同組合」と「コミュニティ」が結びつく「先進モデル」

従来は分離していた「生活協同組合」と「コミュニティ」が結びつき始めた事例は、人口減少社会における「人と地域の先進モデル」といえます。コミュニティ単位で「地域の住民自治」と「生協という協同する資源」と「行政や公的制度」が緩やかに補いあいます。コミュニティを支える仕事に関わることで、生協の職場でも「仕事の評価軸」が転換し、成果を測る指標は、効率（収益性管理）から地域の持続可能性と住民の生活への貢献であることが実感され、職員の定着率向上に繋がっています。

合併や規模拡大を合理化・効率化で推進する発想からは生まれにくい、協同組合とコミュニティの結びつきを力にした新しい「協同」です。「税と社会保障の再配分」が貧困を拡大していることに比べれば、人と地域をつなげる協同組合が「共益組織」から「公益組織」に変化していることの意義は注目されます。持続可能な開発目標（SDGs）でも、企業とは異なる協同組合の特徴（事業と活動と地域の三側面を循環させる）が注目されていますが、公開セミナーの各報告はその姿を実感するものでした。

（むかい・しのぶ）

※画像はセミナー実践報告スライドを掲載

※「人口減少社会と協同組合」第2回公開セミナー報告は177号（5月号）にも掲載します

「市民が協働を学ぶ講座」概要報告—最終報告—

第 7 回講座：2019 年 3 月 1 日（金）参加 14 人「地域をかえる住民の力とは」

第 7 回はいままでの講座の内容を踏まえて、①2030 年までにつくり上げたい「市民協働像」をどう示すことができるかについてグループワークを通して考える、②第 1 ステップをとおして第 2 ステップで実践的に学びたいことを示す、この二つが第 7 回の目的です（1 時間ほどのグループワークの後に発表）。

グループワークの発表

A グループ

まず今回の各講座で学んだこと、感じたことをだしあった。人口減少社会はとめられないが、その中で増える地域もあり、自分の地域でどのようなコミュニティを作れるかを学んだ。2050 年のグランドビジョンの領域や直面している問題を解決していく力はどこにあるのか、そのヒントが得られた。東海交流フォーラムでは時間がすくないが、今回の講座では時間をかけじっくり深めることができ、学ぶ事ができた。若者で、頑張っている人が浮かび上がった。いままでバラバラであったが、フィールドは違いがあっても起きている動きとしては、それを越えて、つながりが模索できるようになった。組織の壁が溶けてきているという話も、それぞれの組織がそれぞれ頑張っているが、それだけでは、壁があり限界がある。それらの組織が融合を生み出す動きがでていのではないかと。協働の有り方では、今までにはないあり方がもとめられてくるのではないかと。いままでの市民運動のような、例えば公害問題に対する「怒り」や商品などに対する「要求」によるつながりではなく、阪神・淡路大震災時のボランティアのような、いっしょになにかを作り出す協働に変化してきている。現在中山間地域に残っているのは、学生時代のスクールカーストでは下位のマイルドヤンキーで、それが地域で活躍して、キーパーソンにもなっている。教育は従来の型にはめるものでないあり方がもとめられている。それぞれもっている資源や個性を生かすようなあり方が必要。

B グループ

全体を通じて学んだことでは、ここまでの実践をあらためて実感することができた。紙の資料だけでなく、実際に活動されている人の「生の声」を聴くことができた。実践している人の凄さは、漫画「ONE PIECE（ワンピース）」の話しに似ている。「ワンピース」にはひとりひとり物語があり、海賊王を支え

る仲間のひとりひとりのささえがあり、また仲間たちには自分たちの目標がある。ここに表現されている協働は、私達の協働とは親和性を感じる。組織を大事にすることと同時に、ひとりひとりを大事にしつつ、力が発揮されるのではないかと。

ひとつ一つの講義、ささえあいの家、子ども食堂等具体的な手法が話されていた。理解のある地域ではすすむが、理解がむづかしい地域ではどうするかで、杉崎さんの手法を学んでもち帰って、具体的に持続可能な活動につながる話だった。具体的に持ち帰って、動くことが大事だということを感じた。

しかし、南医療生協の活動も、ささえあいを家の活動も、昔でいえばベーシックに存在していた活動ではないかと。現代社会ではつながりが薄れたりして、今では対価を払わないとできないことになっている。本来あったものを取り戻さないといけないという議論と、社会が変ってきているので、失われたものを再評価しつつ 今を生きるひとに見合ったサービスに生まれかわる考え方の議論をする必要がある。つながりをつくるために、メディエーター（仲介者）が必要ではないかという話もでた。また、オルガナイザーという形ではなく、両方の立場に立って、中間で働く人が必要ではないか、という指摘もあった。

全体議論

以上二つのグループ発表について、さらに質問や批評などおこない議論を深めました（内容は『地域と協同』誌上に紹介します。午後からは、この 7 回の講座をうけて、向井清史先生の講評を聞きました。この内容は前回のセンターニュースに掲載していません。

市民協働サポーター（任意）認証式

今回 3 テーマ以上の受講者を対象に、「市民協働サポーター」と認定し、19 人名が認定カードを授与しました。

今回の講座を引き継ぎ、2019 年度第二期の講座の企画が検討されています。

熊崎 辰広

（くまざき・たつひろ、「市民が協働を学ぶ講座」運営委員）

第13回三河地域懇談会 豊橋生協会館へ寄らまいかん 開催

テーマは食と健康

文責：伊藤小友美（事務局）

2019年3月23日（土）、コープあいちの豊橋生協会館にて、60名の参加で3回目の「豊橋生協会館へ寄らまいかん」（第13回三河地域懇談会）を開催しました。今年は、地域で活動しているみなさんに呼びかけて、実行委員会を立ち上げ、準備を重ねました。

一日の概要を紹介します。オープニングは、全員参加でコープあいちの「ほこちゃん体操」をしました。少々ハードでしたが体も心もほぐれて、笑顔がこぼれました。＜おいしいものコーナー＞は地元メーカー、生産者のみなさんによる試食・即売・交流のコーナーです。ランチは、災害時にも役立つポリ袋調理によるクラムチャウダー、エビピラフ等です。あんずカフェ（コープあいち組合員のグループ）による美味しいコーヒーとお菓子、新城から届いた「やなまるコロッケ」も好評でした。＜学びコーナー＞では、(株)ワルツの宮澤和也さんより、東海3生協で取り組むスクールバッグプロジェクト（ディルマ紅茶1点の利用1円を支援金として拠出、スリランカの子どもたちにスクールバッグを寄贈しています）についてお話いただきました。午後からは、管理栄養士の大久保里香さんの「野菜のお話+災害時に備えて」のお話を聞きました。愛知県は、野菜の摂取量全国ワースト1です。あらためて野菜のことを学び、健康で暮らすためにはもっと野菜を摂らないといけないことを、みんな実感しました。野菜の花のクイズや、野菜と果物の違い、どの部分を食べているかというクイズもあり盛り上がりました。ちなみに、実を食べているのはトマト・きゅうり・なす、根を食べているのは大根・にんじん・ごぼう、葉を食べているのはほうれん草・はくさい・キャベツ、つぼみを食べているのはブロッコリー・カリフラワー、茎を食べているのはアスパラガス・ふき・たけのこ等です。井関道夫先生の指導による＜子どものためのものづくり理科教室＞では、「ぶんぶんゴマ」と「水にもぐる金魚」を楽しみながらつくりました。＜地域のグループコーナー＞では、平和や環境、たすけあい、ユニセフ、健康づくりの活動等をしているグループの展示やバザーがあり、あちこちで交流する姿が見られました。コープあいちのテーマグループ「一粒の麦を語る会」主催のしゃべり場では、生協への思い・期待等が参加者ひとりひとりの言葉で語られました。他に「小規模多機能ホーム豊橋西」施設見学も企画しました。クロージングは、フルート、ギター、キーボードの演奏とともにみんなで「ふるさと」等を歌いました。



当日参加された方からは「出会いの場にもなり、私の人脈が広がりました。」「ディルマの紅茶のすばらしさがよくわかりました。」「野菜のこと、知っているようで知らないことが多かった。」等のご意見をいただきました。

まとめの実行委員会では、参加を広める取り組みについて、さまざまな反省の意見が出されました。でも、種をまき続けることが大事で、地域における居場所づくりの一環として、引き続き学び、交流しながら「豊橋生協会館へ寄らまいかん」を開催していこうと話しました。

企画・運営・参加に関わるグループが増えたことを力に、次回は早めに実行委員会を立ち上げて、地域の方々に参加していただけるように努力したいと思います。

「豊橋生協会館へ寄らまいかん」に参加して

実行委員 水藤 典子

今回で3回目を迎えた「寄らまいかん」に実行委員として準備に参加してきました。生産者の方や地域のグループの人達の協力のおかげで、盛り沢山の内容となりました。展示、バザー、学びのコーナー、理科教室、しゃべり場等々、多彩な企画で、災害時に役立つポリ袋調理のランチ、新城市名物の「やなまるコロッケ」も好評でした。参加された人達には十分満足してもらえたと思います。ただ残念だったのは、一般の人の参加が少なかった気がする事です。

三河地域懇談会の企画としての「寄らまいかん」の主旨をもう少し明確にして、組合員、生協職員に伝えることが大事なと思います。フェスタとは少し異なる、地域のつながりと学びの要素を含んだ催しであることをPRし、沢山の人達に来てもらえるように取り組めるといいなというのが感想です。実行委員会に参加するグループが来年はもっと増えることを念じています。

情報クリップ



NAVI 2019. 4 No. 805 「店舗での、商品を通じた生協ファンづくり」

日本生活協同組合連合会 2019 年 4 月、A 4 判、36 頁、360 円

特集 店舗での、商品を通じた生協ファンづくり

- <コープのある風景> CO・OPとやま
- <今日も笑顔のコープさん生協の仲間のお仕事拝見>
ならコープ 山本翔貴さん
- <想いをかたちにコープ商品>
CO・OP豆乳飲料プルーン+Fe
- <生協大好きママ コプ山さんの 教えて!CO・OP商品>
CO・OP発酵バターが薫るバウムクーヘン
- <ZOOM IN 生協の店舗づくり>
コープやまぐち ここと新下関店
- <くらし丸ごと応援!コープの事業>
パルシステム東京 (保育園事業)

- <組合員さんが語る私の生協ライフ>
おかやまコープ
- <世界と日本の協同組合>
メルピニャーノコープ (イタリア)
- <日本全国 宅配現場におじゃまします!>
パルシステム千葉
- <いつでもどこでも 地域とくらしを支えます>
生協ひろしま・エフコープ
- <明日のくらし ささえあう CO・OP共済>
コープおおいたコープうすき
- <この人に聴きたい>
アーティスト・タレント 鈴木亜美さん
- <ほっとnavi> コープえひめ いわて生協

生協運営資料 2019. 3 No. 306 次の災害にどう備えるのか 進化する生協のBCP

日本生活協同組合連合会 2019 年 3 月、B 5 判、100 頁、870 円 (送料別)

巻頭インタビュー ●わが生協かくありたい!

自ら判断し行動できる職員集団と事業連携の力で経営を再建 地域から頼りにされる存在を目指す
コープながの●代表理事 理事長 太田栄一氏

- 4 「被災地に生協あり」の遺伝子を受け継ぎ実践的な訓練を通してBCPのPDCAを回す
みやぎ生協●サービス・保証事業部 部長補佐
兼 BCP 事務局 五十嵐桂樹氏
機関運営部 機関運営課 兼専務理事スタッフ 千葉 徹氏
機関運営課 兼 広報課 課長 稲葉勝美氏

特集

次の災害にどう備えるか進化する生協のBCP

- 1 緊急時を振り返り雪害対応のBCPを作成 情報の連携と共有を進め、想定を超える災害に備える
コープ北陸事業連合●代表理事 専務理事
小形 巧氏
管理本部 総合企画部 総合企画グループ
次長 森田 満氏
- 2 豪雨災害時に機能した大規模災害対応マニュアル 今後は進行型災害に対応できる内容に進化させていく
生協ひろしま●総合企画室
統合マネジメントグループ担当課長 上田屋修司氏
くらし応援グループ 統括課長 柏原民季氏
- 3 災害とブラックアウトに見舞われた日の対応から社会給食と位置付ける事業の意義と可能性を感じる
コープさっぽろ●商品本部 デリカ部部長 鈴木裕子氏
宅配事業本部 配食事業部 部長 佐藤政宏氏
人事本部 広報採用部 部長 緒方恵美氏

- これからの店舗事業のあり方を考える
第 17 回 利用の入り口として宅配との利用併用を視野に店舗事業の再構築を進める京都生協の挑戦
京都生協●常務理事 鮫江賢光氏

- 全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ
第 30 回 宅配の看板と地盤を生かして「おいしい」「たのしい」「ヘルシー」を毎日お届けするユーコープの配食事業
ユーコープ●宅配運営部 宅配事業企画課
配食サービスグループリーダー 真柄敬太氏
担当 市川 剛氏

特別企画

市民の力と知恵を持ち寄って主体的な復興を復興の当事者が集い、学ぶ場の意義とは
コープふくしま●代表理事 理事長 今野順夫氏

月刊 J A 2019.4 vol.770

全国農業協同組合中央会 2019 年 4 月、A4 判、48 頁、年間予約 5,109 円（消費税込）

スゴイ農業、スゴイ J A

J A 自己改革の現場から

遠隔産地が実践するマーケットインに基づく産地づくり

— J A いぶすき（鹿児島県）の取り組み

西井賢悟

J A ・農政トピック

J A で働くことの意味について考える

— 新規採用職員の皆さまへ、

そして、先輩・管理職の皆さまへ

J A 全中 教育企画部 教育企画課

きずな春秋——協同のこころ——

童門冬二

展望 J A の進むべき道

経済合理性だけでかたつけることができない農村の営み、

価値

中家 徹（J A 全中会長）

協同組合と SDGs

第 1 回 SDGs とは？

日本協同組合連携機構（J C A）協同組合連携部

私のオピニオン

古田大輔

海外だより [D.C.通信] 連載 95

アメリカ農業の将来展望

— 第 95 回農務省アウトロクック・フォーラム

吉澤龍一郎

吉本興業 SDGs の取り組み

まとも/勝木美徳

コミック「畏ガール」が異例のヒット

浅川 哲（『電撃マオウ』編集部）

緑山のぶひろ（リアル農家マンガ家）

文化連情報 2019.4 No.493 環境激変のなかの厚生連医療と農協福祉

日本文化厚生農業協同組合連合会 2019 年 4 月、A4 判、88 頁、文化連情報編集部 03-3370-2529 * 注

農協組合長インタビュー (54)

組合員との一体感を大事に

坂下隆行

環境激変のなかの厚生連医療と農協福祉

新しい年度を迎えて

東公敏

医薬品交渉の是正を求め、厚労大臣・財務大臣あての「要請書」を提出しました

院長リレーインタビュー (309)

「地域医療を学ぶなら佐渡へ」掲げて、地域包括ケアのシステム構築

佐藤賢治

二木教授の医療時評 (168)

保健医療の費用対効果評価に「労働（生産性）損失」を含めるべきか？

二木 立

「オブジーボ亡国論」を反証する（下）

給付制限ではなく薬価算定システムの抜本改革を

醍醐 聰

一門さんのことば④ 若い職員のみなさんへ

佐治 実

利用者・医師がともに出資・運営する

「統合型協同組合」によるバルセロナ病院

スペイン協同組合の事例報告 高橋 巖

多様な福祉レジームと海外人材 (13)

留学生の生活

安里和晃

臨床倫理メディエーション (32)

攻撃（人を傷つける心）と倫理

中西淑美

「第 27 回農協生活福祉研究会・農協福祉事業開発セミナー」を開催

中村駿一

岡田玲一郎の間歇言 (153)

看護基準は教条的な現状からフレキシブルな基準

を求めて 岡田玲一郎

古代国家の謎 天孫民族はどこから来たか（下）

～古代から東アジアの未来への伝言～

村上 一彦

野の風 ● インテリア・デザインは認知症予防に有効か

小針秀夫

デンマーク & 世界の地域居住 (119)

豊明市のダイナミックな挑戦 3 松岡洋子

南医療生協組合員によるおたがいさまの家「いっぶく」、住民主体型生活サポート事業「ちゃっと」/南医療生協・J A あいち尾東・コープあいちの 3 協同組合による住民主体型生活サポート事業「ちゃっと」/コープあいちとよあけ店による買い物支援と「ふれあい便」による配達サービス/巡回バスを走らせる天然温泉施設や民間のフィットネスクラブ

熱帯の自然誌 (37) 欠かすことの出来ない塩

安間繁樹

イギリスの病院 (9)

Victoria Road Health Centre (1) 施設の概要

小磯 明

◆第 5 回厚生連病院臨床研究研修会開催のお知らせ

◆平成 31 年度厚生連院内感染予防対策研修会開催のお知らせ

□書籍紹介

THE 中医協

ギリシャ危機とゆらぐ欧州民主主義

安楽死・尊厳死の現在

BREXIT

社会保障論

▶線路は続く (129)

山陽本線の難所 瀬野八に挑む/西出健史

2019 年 4 月 25 日

会員のみなさま

地域と協同の研究センター
代表理事 西川幸城

地域と協同の研究センター「第 19 回通常総会」と「総会記念シンポジウム」を開催します

記

- 一、ご案内 地域と協同の研究センター第 19 回通常総会
- 一、日 時 2019 年 5 月 25 日（土）10：30～12：15
- 一、会 場 生活協同組合コープあいち生協生活文化会館 4 階

名古屋市千種区稲舟通 1-39

- 一、審議事項 第 1 号議案「2018 年度事業報告と決算承認の件」
第 2 号議案「2019 年度事業計画と予算決定の件」
第 3 号議案「定款の一部変更の件」
第 4 号議案「役員の一部補欠選挙の件」

一、第 19 回通常総会「総会記念シンポジウム」

当日の午後は同会場にて総会記念シンポジウムを開催します。シンポジウムは一般の方にもご参加いただけます。お知り合いをお誘いいただき、ご参加ください

テーマ「新しい生協像への視座」

一新著「協同による社会デザイン」が問いかけるものー

日 時 5 月 25 日（土）13：15～15：30

会 場 コープあいち生協生活文化会館 4 階会議室

参加費 無料

詳しくは次頁をご覧ください

以上

<問合せ先>

地域と協同の研究センター（事務局）

phone : 052-781-8280 fax : 052-781-8315 e-mail AEL03416@nifty.com

担当：大島，渡辺

<会員規約より>

第 2 条（会員の種類と性格）

地域と協同の研究センターの会員は、個人又は団体の正会員及び個人又は団体の賛助会員からなります。

- 2 正会員は、総会における表決権はそれぞれ 1 票とします。賛助会員は、総会に出席し発言することができませんが表決権をもちません。

地域と協同の研究センター第 19 回通常総会・総会記念シンポジウム「参加申し込み」

お名前	お住まい（行政区）	
様		
総会記念シンポジウム「新しい生協像への視座」	参加	不参加
午後から総会記念シンポジウムを予定しております 昼食お弁当のご希望についてお知らせください（有料 700 円）	要	不要

phone : 052-781-8280 fax : 052-781-8315 e-mail AEL03416@nifty.com ※申し込み期日；5 月 22 日（水）

第 19 回通常総会「総会記念シンポジウム」開催のご案内

総会記念シンポジウム

テーマ「新しい生協像への視座」

－新著「協同による社会デザイン」が問いかけるもの－

地域生協が設立・発展してきた経済社会の環境は、長期の低成長へと変化し、人口減少社会を迎えています。一方、国は労働人口が減少する 2040 年を視野に生産性向上を掲げ、働き方改革に着手しています。

I C A（国際協同組合同盟）や日本生協連、また各生協でも 2030 年ビジョンの検討を始めています。その中では、地域社会の持続可能性と一体なものとして、「(生活) 協同組合の事業の持続可能性とは」「働き方改革をどう進めるのか」「生協事業の効率性とは」を深めることが不可欠になっています。

地域と協同の研究センター・「生協の（未来の）あり方研究会」では、新著「協同による社会デザイン」（4 月 25 日発刊）の準備をとおして、これからの社会における生協の役割を探ってきました。総会記念シンポジウムでは、「協同による社会デザイン」は現代社会と時代の変容をどのようにとらえているか、新しい生協像（事業や活動のあり方）にどのような問題提起をしているのか、東海の生協の今をどのように考えているのか、執筆者からの報告をうけて話し合います。

日時 5 月 25 日（土）13：15～15：30（参加費・無料）

会場 コープあいち生協生活文化会館 4 階会議室 1

<進行予定>

シンポジウム・コーディネーター

小木曾洋司氏（中京大学教授）

報告者①「協同による社会デザイン」の問題提起－社会の変容と協同の社会システム

兼子厚之氏（元研究センター理事）

報告者②「他者志向的事業体」として生協を見直す

向井清史氏（名古屋市立大学大学院特任教授）

報告者③「地域福祉型生協の展開と可能性」

朝倉美江氏（金城学院大学教授）

報告者④「東海における生協の今」

河原洋之氏（コープぎふ参与）

磯村隆樹氏（東海コープ事業連合常務理事）

意見交換 「生協の新しい視座」とは

シンポジウム・コーディネーター、報告者は「生協の（未来の）あり方研究会」メンバーです。一般の方も参加可能です。お知り合いとお誘いあわせのうえ、ご参加ください

第一回学習討論集会

平和と民主主義、一人ひとりの人間を大切にする

「新しい社会主義への展望」を巡って

今の時代、多くの若者やまじめに働く人々が、社会の時代に飽き足らず、「夢と希望の持てる明日の社会への展望」を模索し、実現したいと考えているのではないのでしょうか？

◆期日：2019年5月11日（土） 14:00～18:00

◆会場：愛知民主会館 2Fホール9階901（地下鉄新栄② 出口より2分）

◆参加費 無料*ただしカンパをお願いします

◆問題提起：河邑重光氏（名古屋大学出身。元赤旗編集局長。著書に『反共市民主義批判』新日本出版社、1985年）

日本の現実を変革する「新しい社会主義への展望」

主催：「学習討論集会/『新しい社会主義への展望』をめぐる」実行委員会

連絡先：事務局 森 TEL090-4466-5771

研究センターの関係団体より寄贈・書評依頼の書籍を紹介します

日本小農問題研究	玉 真之介 著, 筑波書房
農業における派遣労働力利用の成立条件 (北海道地域農業研究所学術叢書⑨)	高畑 裕樹 著, 筑波書房
拠点づくりからの農山村再生 (JCA研究ブックレットNo.24)	中塚 雅也 著, 小田切 徳美 監修, 筑波書房
ブレクジットと英国農政 農業の多面的機能への支援 (JCA研究ブックレットNo.25)	和泉 真理 著, 筑波書房

※ご希望の方には貸し出しができますので、事務局までお問い合わせください

地域と協同の研究センター 5月の予定

7日(火) NEWS編集委員会, 三重地域懇談会	20日(月) 常任理事会⑫
9日(木) 名古屋市立大学寄付講義④	25日(土) 第19回通常総会, 総会記念シンポジウム
15日(水) 愛知の協同組合間協同相談会	28日(火) 名東区ささえあい組織交流会準備会
16日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑤	30日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑦
17日(金) 三河地域懇談会世話人会	

地域と協同の研究センターNEWS176号
送料込み)

発行日2019年4月25日定価200円(税・

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315